

第35回原子力委員会定例会議議事録（案）

1．日 時 2003年10月28日（火）10：30～11：30

2．場 所 中央合同庁舎第4号館7階 共用743会議室

3．出席者 藤家委員長、木元委員、竹内委員、森嶋委員
内閣府
永松審議官、藤嶋参事官（原子力担当）、後藤企画官

4．議 題

- （1）平成16年度原子力関係経費の見積りについて
- （2）核燃料サイクルについて語る会（伊方町）の結果について
- （3）原子力委員会専門委員の変更について
- （4）その他

5．配布資料

- 資料1 - 1 平成16年度原子力関係経費の見積もりについて(概要)(案)
- 資料1 - 2 平成16年度原子力関係経費の見積もりについて（案）
- 資料2 核燃料サイクルについて語る会（伊方町）結果概要（速報・未定稿）
- 資料3 原子力委員会専門委員の変更について（案）
- 資料4 第34回原子力委員会定例会議議事録（案）

6．審議事項

- （1）平成16年度原子力関係経費の見積りについて

標記の件について、藤嶋参事官より資料1に基づき説明があり、以下のとおり発言があった。

（木元委員）資料1 - 1の「1 - 2 情報公開と情報提供」に「原子力安全規制情報広報・広聴事業委託費」とあるが、「広聴・広報」という順に修正してほしい。「広聴」が先であることが重要で、その直前の文章では「原子力

の安全規制に関する広聴・広報事業を平成16年度より実施し、」とある。

また、このような資料を出すときには、この資料の目玉は何なのか、ということ質問されることが多いし、私も聞きたいと思う。私としては、例えば放射線利用について、16年度要求額も増額になっているが、医療分野を始めとして、特に食品照射での利用について世の中の要望が強くなっているところを挙げたいし、これが目玉になり得るのではないかと思う。

(藤家委員長) 16年度の見積りでは、序文に原子力委員会の「基本認識」を示している。現在の厳しい財政状況の下において、原子力委員会が見積りの審議・決定をすることは非常に重要なことであり、どこに焦点があるのかを最初に示し、最初の部分を読んだだけでもそれを分かってもらえるように最初の序文でアピールしている。今回の見積りでは、ここを特に強調している。この「基本認識」では、核燃料サイクルの確立に向けてのアプローチの仕方という点や、ITER計画に関しては日本が科学技術創造立国を目指すために核融合の分野でも国際的にリーダーシップをとっていくという点、原子力は加速器・レーザーなどを通じて先進科学の基盤となっている点を取り上げており、この考えは要求額にも反映されている。それに加え、JCO事故や原子力発電所における不正問題についても記載し、これらを決して忘れるものではない、十分に踏まえて努力していく、ということを示している。文章が長すぎるとなかなか読んでもらえないところがあるので数ページでまとめており、言い足りないところもあるかもしれないが、こういった点については今後どうしていくのかという点が重要である。

(木元委員) 今後、そのような点について質問があったとき、原子力委員会はきちんと胸を張って答えていくことが重要だと思う。

(竹内委員) まとめ方は良くなってきていると思う。原子力の予算はかなり広範囲にわたっているが、この資料は分野毎にどうなっているのかが分かりやすくまとまっていると思う。

(藤家委員長) 高度成長期の頃の見積りは、いかに予算を多くとるかといったようなところがあったが、今はそのようにはいかない。今後説明をしていく上でも、焦点がどこにあるのかという点を明確にする必要がある。

(木元委員) このような財政状況において相対的に見ると予算が多すぎるのではないかと、と言われることがある。そういった状況の下でも、見積りで重要なところをお示しし、ご理解いただけたところまできちんと説明できるものを持っていなければならない。

(藤家委員長) ライフサイエンスやナノテクノロジーのような分野において

も原子力が支えているところがあり、原子力の予算は科学技術の予算と別の世界のものと思われなければならない。

(森島委員)「3(4)基礎的・基盤的研究」の要求額は、昨年度より少し減額となっているが、どうしてなのか。原子力のように長期的に見なければならないものは、特に基礎的・基盤的研究はしっかりとやっていかなければならない。

(藤家委員長)「3(4)」で挙がっているテーマは、かなり長い歴史を持っているものが多い。「大型放射光関連」については、新しいもので発展性があるものなので、要求額は少し増えている。また、「高度計算科学技術」について、大型計算機を使ったシミュレーションは、当初は原子力と気象の分野での使用がメインで、計算科学技術はこれらの分野で進歩して今に至っている。原子力試験研究検討会でも取り上げられているところだが、計算科学技術は原子力特有のものではないのではないか、原子力分野における取組はある程度役割を果たしたのではないかと、といったことについて議論されており、こういった状況を踏まえてこのような要求額となっているのだと思う。「研究炉関連」については、要求額が減っているが、日本原子力研究所や核燃料サイクル開発機構の研究炉が整備されてきているので、このような要求額でも仕方がないと考えている。「材料試験炉」について、日本原子力研究所の材料試験炉 J M T R は、30年ぐらい前に建設されたものであり、これまでもいろいろな役割を果たしてきたものである。これを廃止するかどうかという議論もあったが、このような施設を残しておいて良かったということがよくある。J M T R については、これから新しい世界が開けてくるかどうか、軽水炉等で課題になっている材料に関しての照射試験等に使えるのではないかと、といった点についての議論が残っている。

(森島委員)原子力発電に関する取組は主に民間で行っているが、国としてはこのような基礎的・基盤的研究の予算をきちんと確保してやっていかなければならないと思う。

「2-4 高速増殖炉サイクル技術の研究開発」の「もんじゅ」の記載において「国は上訴したところ」とあるが、この場合は「上告」である。「上訴」という表現でも間違いではないが、第二審の裁判所への不服申立てである「控訴」と第三審の裁判所への不服申立てである「上告」を併せて「上訴」としている。

(藤家委員長)「広聴・広報」と「上告」の2点については訂正することとしたい。

見積りの審議においては、枠取りについて議論しているのか、その枠の

中のものの目的の重要性を主張しながら議論しているのか、難しいところがある。例えば、革新的原子力システムの公募研究については、大学にも参加いただいているが、これは夢を求めているところもあるので、「積極的に夢を出してください、我々は干渉しない」としているところがある。こういった施策については、これだけの予算を用意したので使ってください、というように予算の枠取りだけを主に考え、特にアカデミアにやってもらうものについては、原子力委員会はあまり主導性を発揮しない方が良く思っている。しかし、このようなやり方は、見積りの審議においてつらいところがある。原子力委員会としては、「研究の自由」は残しながら、いくつか顕著なところをその中から抽出して説明する、という努力が必要かと思っている。これは、原子力安全委員会の安全研究年次計画でも同じようなところがあり、従来の枠組みについてだけではない説明が必要である。革新炉検討会では、革新的原子力システムを17のアイデアにまとめているが、こういった観点からさらに評価していくことが重要だと思う。

(藤家委員長) それでは、「広報・広聴」を「広聴・広報」に、「上訴」を「上告」に修正した上で、「平成16年度原子力関係経費の見積りについて」を委員会決定したい。

(2) 核燃料サイクルについて語る会(伊方町)の結果について

標記の件について、藤嶋参事官より資料2に基づき説明があり、以下のとおり発言があった。

(竹内委員) 今回の核燃料サイクルについて語る会は、良い結果を得ることができた。伊方では、環境監視委員会において幅広い分野の方々が自然体で話し合っており、地元と電気事業者が良い関係を築いていることを実感した。他の地域の方々とも今日のような形で語る会を続けていきたい。

(森島委員) 四国電力と地元の関係が非常に良好であることと、伊方も含めて、地元で作られた電力が地元で使われているということが、東京電力や関西電力とは立場が違っていると感じられた。地元の方々と共に四国電力の発電所を訪問したが、発電所側の対応が非常にオープンであった。これからは、地元の方々への直接の対応だけでなく、電力会社が地元の方々とのようなコミュニケーションを取っていかなくてはならないか考えないといけないと思う。会議自体は非常に有益であった。

(木元委員) このような会において、今までは、順番に一問一答方式で会議が進むことが多かったが、今回は円卓状になってお互いが顔の見える状況で話が行えるように工夫し、それが良い結果となったと思う。また、参加された方が自然体で自分の言葉で話され、本音で、それぞれの疑問をぶつけながら発言されていたため、一問一答で終わるのではなく話のやりとりができたのが非常に良かったと思う。資料2の5ページ下から7行目の伊方町の女性の方の発言で、「正しく怖がる」という言葉があった。これは、寺田寅彦氏の言葉を引用したものであるが、原子力が怖いものであるということ認識し、その怖さを正しく認識するという意味で使われた。この言葉は非常に良い言葉であると思う。また、同じ方からの発言で、資料2の6ページ4行目に「伊方では地元での努力の割に国と地元との距離がある」という発言があった。伊方では、国と地元の距離があまり無いように感じられたが、地元から見るとまだ距離があるという感触をお持ちになっているようだ。その後「自分たちはもっともっと中央の情報や指導を得ていきたい」とおっしゃっているが、国の考えていることが地元が届いていないというもどかしさもあると思う。そこで、お答えしたことであるが、直接会えなくても、今はメール等でやりとりができるので、もっと地元からも国に言ってほしいと思う。この核燃料サイクルについて語る会では、何かあったら一緒に考えようという姿勢をお互いに確認できたことが収穫であったと思う。まだ第1回目であるので、これからも伊方町との話し合いを継続し、フォローをしていくことが大事であると思う。

(藤家委員長) この発言者の方が、「原子力委員の方が伊方にきて、国と地元の距離が縮んだように思う」と後でおっしゃっていたが、お互いに顔を知らないつらさがあったと思う。

(木元委員) 原子力委員5人全員がそろわなくとも、1人でも行ける機会があれば、事業者に会う前に、地元の方と交流しあう関係を作りたい。

(藤家委員長) 原子力委員会から見れば、地方自治体、行政庁、事業者は、同じように重要性を持っており、行政庁、事業者を通してのみ地元と接触しているわけではない。

(木元委員) 市民参加懇談会では行政や事業者を通さずに、ダイレクトに地元と話をする形も取っている。その姿勢は重要であると改めて認識した。

(藤家委員長) 毎回原子力委員5人が地元を訪ねるのは大変なことである。今回は原子力委員全員がうまくそろったので良かったと思う。本日は、遠藤委員長代理が日仏原子力専門家会合に出席し、また明日は竹内委員が仙台で開催される原子力学会にて「核燃料サイクルについて」を説明するこ

ととなっている。

(竹内委員) 原子力学会の「再処理・リサイクル部会」の部会長をやっており、そのセッションが明日行われる。機会があるたびに、原子力委員会が8月にとりまとめた「核燃料サイクルについて」を皆様方に紹介している。どこでも話す内容は同じであるが、学会では技術的な話を深めながら説明する予定である。

(藤家委員長) ぜひ、その場で今まで原子力委員会にて議論してきた話をし
て頂きたい。また、今回は再処理がメインになっているため、「核燃料サイ
クルについて」で示した第3段階(高速増殖炉サイクルの確立)について
はあまり説明していないと思うので、その点について説明してほしい。

(竹内委員) この学会は、高速増殖炉サイクルの一部となるバックエンドと
再処理の開発を行っている当事者が参加している。そこでは、第3段階は
高速増殖炉サイクルであると原子力委員会が考えている、というメッセー
ジを伝える形になると思う。

(木元委員) 学会というのは、原子力仲間であると思う。そういう中で話す
ことと、それとは異なるシンポジウム等では温度差が非常にあり、「MOX
(混合酸化物燃料)とは何か」から始めなければならない場合がある。そ
ういうことをきちんと伝えることが、広聴・広報であると思う。

(藤家委員長) 中身をきちんと説明し、その中身を社会に向けていかにわか
りやすく説明していくかも重要である。お互いの連携をどのように確保し
てゆくかを考えないといけないと思う。学会では専門用語を使えば話が短
縮できる。学会ではそのようにすればいいが、学会においても、いつも社
会に目を向けてないといけない。

(竹内委員) 閣議決定されたエネルギー基本計画では、原子力の位置付けを
はっきり打ち出しているが、一般の方はあまり知らないと思う。機会を見
てははっきりと言っていくことが大事である。

(藤家委員長) 伊方で行った「核燃料サイクルについて語る会」は成功した
と思う。これからもこのような会は続けていきたい。

(3) 原子力委員会専門委員の変更について

標記の件について、藤嶋参事官より資料2に基づき説明があり、承認され
た。

(4) その他

- ・事務局作成の資料4の第34回原子力委員会定例会議議事録(案)が了承された。
- ・事務局より、11月4日(火)に次回定例会議が開催される旨、発言があった。